

セジロウンカ

○ 被害と発生生態

トビイロウンカと同様、国内では越冬できず、毎年、中国大陸から東シナ海を渡って成虫が飛来する。トビイロウンカのようにほ場内での著しい増殖はないが飛来量はトビイロウンカよりも多く、年によっては局所的に多飛来することがある。

本種による被害は、イネの活着期前後に多飛来があった場合の産卵痕や吸汁による障害で、イネが黄化し初期生育が抑制される。また、分げつ抑制や節間の短縮などにより収量の低下を引き起こし、被害が著しい場合には下葉が枯れ、さらに著しくなると枯死する。山口県では通常7月中旬から8月中旬にセジロウンカの発生密度が最も高くなるが、この時期にイネの生育ステージが穂ばらみ期から出穂前に当たり、成幼虫の密度が非常に高くなった場合、褐変穂や黒色米が発生することがある。さらに、吸汁によりイネの養水分が奪われ、登熟歩合や千粒重の減少や品質の低下が生じることがある。

出穂後は水田外へ移出する長翅成虫が多くなり水田内の密度は急激に減少するため、大きな被害が出ることはない。

○ 防除方法

(ア) 耕種的・物理的防除

- ・ 周囲より極端な遅植えは避ける。

(イ) 薬剤防除

- ・ 発生予察情報を参考にし、ほ場での発生動向を確認する。
- ・ 通常の飛来では飛来世代に対する防除の必要はないが、飛来時に株当たり10頭以上発見されれば防除を行う。
- ・ 穂ばらみ中期までに株当たり50頭以上（成幼虫）確認されれば褐変穂を生じる恐れがあるので防除を行う。
- ・ 6月中下旬移植では分げつ抑制を回避するため、株当たり50頭以上（成幼虫）確認されれば防除を行う。
- ・ 散布後は必ず効果を確認し、必要に応じて追加防除を行う。
- ・ 出穂期後の防除は必要ない。



成虫



産卵痕



多発した株